

また、十八年の召集になったとき耕地を近所の人に貸して出征しました。妻子は妻の生家に頼み面倒をみていただきました。そのとき耕地を貸すときの約束に、万が一に無事に帰ったときはいつでもすぐに返してくれる約束でしたが、四年間のシベリア抑留中に農地法という法律ができたのでただでは返すことができないとのことでした。帰国して喜んだのも束の間でした。職を探しても職はなく、山中に入ってまき切りや土工作業で生活をしてまいりました。幸い私は健康で働きましたが、妻が体が弱くて苦勞の種でした。

ナホトカの汀に立ちて

北海道 塚本光雄

収容所の思い出

一、サボタージュ

「なあおい、働いてもサボっても同じ五合のかゆじやないか。こんな調子で働かされちゃ体が二つあって

も、二度と女房の顔も拝めないで態よくお陀仏だぜ、こうなったらとにかく要領よくまわらなくっちゃあな」と、ひそひそ話し合い、団体作業の中であって、歩哨の目を盗み監督の目をごまかして、果ては我々一同の迷惑も考えずに、彼らはたき火にばかりかじりついて、いわばグループの厄介者となって得々としていた連中がどこの組にも二、三人はいたものであるが、やがてこの山奥の収容所にも春の陽光が訪れると、彼らの思惑とは反対に、いつしか彼ら自身がシベリアほけという妙な趣向にとりつかれて、比較的容易な作業の場合でも怪我をしたり、または命を落とすような羽目に至った場合が少なくなかったのである。

これに引きかえ、団体構成の主要メンバーとして、終始一同の矢面に立ち、ユーモアの一つも飛ばしながら率先危ない仕事や苦しい労働を引き受け、シベリア特有の寒風の中、台車の上に登ってトビや鉄棒や一本での芸当的作業に従事してくれた人たちがいたのである。いつ丸太の下敷きになるかと思われる危ない作業に従事して、彼らの口をして言わしめれば、「はき捨

て草履のように、さんざんに利用されてあげくの果てはお払い箱さ、到底春の日まではもたないお人好しよ。」とひそかにあざけり眺めていた男が、実は彼らの期待に反して、体力においても、いわんや精神面のありようなぞは到底前者の及びもつかないほど健康であつたということである。

また、時には体を害しても、彼の平素を信用しているので、ソ連軍医も必要以上にまで休養を認めたものであるが、これに反し平素サボッてばかりいる彼らに對しては、眞実体が悪くなつたときでも、なかなか休養を認めず否やも言わせず作業に駆り立てられたものである。幸い私たちのグループの中には、団体作業の中堅となつてなれない我々をリードし率先働いてくれた方が多数いたので、苦しい作業の中にも笑い合い励まし合つたことを思い、今もこれらの方々に心から感謝しているのである。

当時隣に幕舎を連ねた中隊のごときは、ソ連兵監督また日本人同志からも、「あああの中隊か……。」とあきれるような作業成績の悪い中隊があつた。この中隊

は各地方の寄せ集めの中隊とかで、收容所内での統一に欠け、勢い団体単位の作業能率なぞ上がらうはずもなかつた。(実は私たちにとつて作業能率なぞ関係ないのではあるが) この中隊が特に作業場での死傷者が多かつたことは、他に比を見なかつたのである。前記と思ひ合わせて作業中いかにお互いが注意し合ひ、かばひ合つて、同じ仕事の目標も理解し合うことなどが、結果においてやはり個人個人を守り抜いたということに思ひ至るのである。

二、氣力と撰生

次に、あの非衛生なシラミの温床下の団体生活、加えてカロリーの過少に抗しながらの生活で、結核關係の病氣が高進し死に至つたという方は、私の知る限りでは、五指を数うるしかないなかつたことに對し、いかに現代医学を超越した、すなわち「石にかじりついても帰りたい」との精神力の偉大さを今も驚異の一つと思つてゐるのである。次に、何よりも、個人個人の撰生にあつたということである。

何一つ樂しみのない抑留生活に加えて、過重なる労

働に対する必然的な、生命維持への食の欲求は実に体験者でなくては理解し得ないものの一つである。その結果は、空腹さに耐えかねて松の実を皮ごと食べたり、もみやエン麦など、馬糧を失敬しては煎（い）って食べたり、果ては支給のかゆだけでは空腹で寝つかれないとして、大量のお湯を加えて、一時的満腹感にしたって寝るというような、それはもう狂気じみた悪風が当時相当に流行したのである。

この結果は、日中の冷えに加えて大量の水分排せつの自然的現象のため、夜間数回にわたる小用を強制される始末となり、睡眠不足の結果、知らず知らずのうちに活気を失い、全身がむくんできて、春風が吹き始めるころには、もうそんな人のほとんどは栄養失調となつてバタバタと倒れてゆき、病室は時ならぬにぎわいを呈したのである。その人たちの多くは、以前は人一倍頑健な方で、病気などには縁のなかったさまたまな人が多かった。ということは、自分の健康に油断して、ついに食への欲望の奴隷となつて自己への摂生を忘却し果てた結果ではなからうか。

三、手職無視の命令

もち屋の子にはもち屋ということわざのように適材適所であれば矛盾もないが、ペンを持つしか芸のない者にロシア鋸を、くわを持つことしか知らぬお百姓に大工を、果てはトビの仕事も、ともあれ監督に命ぜられたら百年目、絶対に言いわけを聞いてくれなかったのである。私の友の一人もこのトビの仕事を強制され、ものの二時間もたたないうちに三階から転落して即死してしまったことがあるが、この作業場での強制はいつしか必然的な恐怖と、さらに困苦に耐えて一日も早く祖国にたどり着きたいとの思いが高進していった。当時日本へ帰つたら、この体験からして、仕事及び生活上において不平不満などはあり得ないと日夜思い、暮らしたものである。

四、赤裸々の人間性

こうした収容所生活の日常にあつては、勢いおのれ一人の身のふり方にさえきゅうきゅうとする中で、あえて進んで友のために犠牲になるということは至難の業であるが、軍隊当時はその存在さえも知らなかった

ような人が、この地に渡ってからはかえって、その苦境の生活に負けず、戦友及び団体の中堅となつて、体力の弱い人を庇護したり、嫌な作業にも進んで代わってくれたりして、同胞愛の神髓を発揮してくれた人々がいたが、一方、軍隊当時、成績拔群とか一選抜とかといわれた者が、生活が苦しくなるにつけ「メッキ」がはげて果ては団体行動さえも乱して顧みないという不徳義漢もいりではなかつた。

私は、この両者の真の人間の価値のいずれが尊いかは、言をまたないと思うのである。

落ちぶれて袖に涙のかかるとき、人の心の奥ぞ知らるる

およそ苦境のどん底にあえぐときこそ、真の人間の品性を赤裸々に表現し得るものであり、これらの方々の心を、私は今もだれにも増して誇り得る深い愛情の持ち主であると深く感謝もし尊んでゐるのである。

以上、収容所での思い出のまゝに二、三記して見たに過ぎないが、実社会においても、いかなる世上の障害に逢着しようとも、すべては真心を基底として、た

ゆむなき努力の彼岸には、おのずとその隘路は切り開かれて行くものであるということを、真に裏づけるものではなからうか。